

なめとこ山の熊

宮沢賢治

青空文庫

なめとこ山の熊くまのことならおもしろい。なめとこ山は大きな山だ。淵ふちざわ沢川はなめとこ山から出て来る。なめとこ山は一年のうち大ていの日はつめたい霧か雲かを吸つたり吐いたりしている。まわりもみんな青黒いなまこや海坊主のような山だ。山のなかごろに大きな洞ほらあな穴あなががらんとあいている。そこから淵沢川がいきなり三百尺ぐらいの滝になつてひのきやいたやのしげみの中をごうと落ちて来る。

中山街道はこのごろは誰たれも歩かないから露ふきやいたどりがいっぱいに生えたり牛が遁にげて登らないように柵さくをみちにたてたりしているけれどもそこをがさがさ三里ばかり行くと向うの方で風が山の頂を通つていような音がする。気をつけてそつちを見ると何だかわけのわからない白い細長いものが山をうごいて落ちてけむりを立てているのがわかる。それがなめとこ山の大空滝だ。そして昔はそのへんには熊がごちやごちや居たそうだ。ほんとうはなめとこ山も熊の胆いも私は自分で見たのではない。人から聞いたり考えたりしたことばかりだ。間ちがつているかもしれないけれども私はそう思うのだ。とにかくなめとこ山の熊の胆いは名高いものになつていゝる。

腹の痛いものにもきけば傷もなおる。鉛の湯の入口になめとこ山の熊の胆いありという昔か

らの看板もかかっている。だからもう熊はなめとこ山で赤い舌をべろべろ吐いて谷をわたったり熊の子供らがすもうをとっておしまいぽかぽか撲りあつたりしていることはたしかだ。熊捕りの名人の淵沢小十郎がそれを片っぱしから捕つたのだ。

淵沢小十郎はすがめの赭あかくろ黒いごりごりしたおやじで胴は小さな白うすぐらいはあつたし掌てのひらは北島の毘沙門びしゃもんさんの病気をなおすための手形ぐらい大きく厚かった。小十郎は夏なら菩提樹マダの皮でこさいえたけらを着てはむばきをはき生せいばん蕃ばんの使うような山刀とポルトガル伝来というような大きな重い鉄砲をもつてたくましい黄いろな犬をつれてなめとこ山からしどけ沢から三つ又からサツカイの山からマミ穴森から白沢からまるで縦横にあるいた。木がいつぱい生えているから谷を溯のぼつていとまるで青黒いトンネルの中を行くようで時にはぱつと緑と黄金きんいろに明るくなることもあればそこら中が花が咲いたように日光が落ちていていることもある。そこを小十郎が、まるで自分の座敷の中を歩いているというふうでゆつくりのつしのつしとやつて行く。犬はさきに立つて崖がけを横よこ這いに走つたりぎぶんと水にかけ込んだり淵ののろのろした気味の悪いとこをもう一生けん命に泳いでやつと向うの岩にのぼるとからだをぶるぶるつとして毛をたてて水をふるい落しそれから鼻をしかめて主人の来るのを待っている。小十郎は膝ひざから上にまるで屏風びょうぶのような白い波をたてながら

コンパスのように足を抜き差しして口を少し曲げながらやって来る。そこであんまり一ぺんに言つてしまつて悪いけれどもなめとこ山あたりの熊は小十郎をすきなのだ。その証拠には熊どもは小十郎がぼちやぼちや谷をこいだり谷の岸の細い平らないっぱいにあざみなどの生えているところを通るときはだまつて高いところから見送つてゐるのだ。木の上から両手で枝にとりついたり崖の上で膝をかかえて座つたりしておもしろそうに小十郎を見送つてゐるのだ。まったく熊どもは小十郎の犬さえすきなようだった。けれどもいくら熊どもだつてすつかり小十郎とぶつつかつて犬がまるで火のついたまりのようになつて飛びつき小十郎が眼めをまるで変に光らして鉄砲をこつちへ構えることはあんまりすきではなかつた。そのときは大い熊は迷惑はげそうに手をふつてそんなことをされるのを断わつた。けれども熊もいろいろだから気の烈はげしいやつならごうごう咆ほえて立ちあがつて、犬などはまるで踏みつぶしそうにしながら小十郎の方へ両手を出してかかつて行く。小十郎はびったり落ち着いて樹きをたてにして立ちながら熊の月の輪をめがけてズドンとやるのだった。すると森までがあつと叫んで熊はどたつと倒れ赤黒い血をどくどく吐き鼻をくんくん鳴らして死んでしまうのだった。小十郎は鉄砲を木へたてかけて注意深くそばへ寄つて来てこう言うのだった。

「熊。おれはてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめえも射たなけあならねえ。ほかの罪のねえ仕事していんだが畑はなし木はお上のものにきまつたし里へ出ても誰も相手にしねえ。仕方なしに獵師なんぞしてるんだ。てめえも熊に生れたが因果ならおれもこんな商売が因果だ。やい。この次には熊なんぞに生れなよ」

そのときは犬もすつかりしよげかえつて眼を細くして座っていた。

何せこの犬ばかりは小十郎が四十の夏うち中みんな赤痢にかかってとうとう小十郎の息子とその妻も死んだ中にびんびんして生きていたのだ。

それから小十郎はふところからとぎすまされた小刀を出して熊の顎のそこから胸から腹へかけて皮をすうつと裂いていくのだった。それからあとの景色は僕は大きらいだ。けれどもとにかくおしまい小十郎がまつ赤な熊の胆をせなかの木のひつに入れて血で毛がぼとぼと房になった毛皮を谷であらつてくるくるまるめせなかにしよつて自分もぐんなりした風で谷を下つて行くことだけはたしかなのだ。

小十郎はもう熊のことばだつてわかるような気がした。ある年の春はやく山の木がまだ一本も青くならないころ小十郎は犬を連れて白沢をすうつとのぼつた。夕方になつて小十郎はぼつかい沢へこえる峯になつた処へ去年の夏こさえた笹小屋へ泊ろうと思つてそこへ

のぼって行つた。そしたらどういふ加減か小十郎の柄にもなく登り口をまちがつてしまつた。

なんべんも谷へ降りてまた登り直して犬もへとへにつかれ小十郎も口を横にまげて息をしながら半分くずれかかつた去年の小屋を見つけた。小十郎がすぐ下に湧水わきみずのあつたのを思い出して少し山を降りかけたら愕おどろいたことは母親とやつと一歳になるかならないよな子熊と二疋ひきちようど人が額に手をあてて遠くを眺ながめるといつたふうに淡い六日の月光の中を向うの谷をしげしげ見つめているのにあつた。小十郎はまるでその二疋の熊のからだから後光が射すように思えてまるで釘くぎつ付けになつたように立ちどまってそつちを見つめていた。すると小熊が甘えるように言つたのだ。

「どうしても雪だよ、おつかさん谷のこつち側だけ白くなっているんだもの。どうしても雪だよ。おつかさん」

すると母親の熊はまだしげしげ見つめていたがやつと言つた。

「雪でないよ、あすこへだけ降るはずがないんだもの」

子熊はまた言つた。

「だから溶けないで残つたのでしよう」

「いいえ、おつかさんはあざみの芽を見に昨日あすこを通ったばかりです」
小十郎もじつとそつちを見た。

月の光が青じろく山の斜面を滑っていた。そこがちようど銀の鎧よろいのように光っているのだった。しばらくたつて子熊が言った。

「雪でなけあ霜だねえ。きつとそうだ」

ほんとうに今夜は霜が降るぞ、お月さまの近くで胃コキエもあんなに青くふるえているし第一お月さまのいろだつてまるで氷のようだ、小十郎がひとりで思った。

「おかあさまはわかったよ、あれねえ、ひきざくらの花」

「なあんだ、ひきざくらの花だい。僕知ってるよ」

「いいえ、お前まだ見たことありません」

「知ってるよ、僕この前とつて来たもの」

「いいえ、あれひきざくらではありません、お前とつて来たのきささげの花でしょう」

「そうだろうか」子熊はとぼけたように答えました。小十郎はなぜかもう胸がいつぱいになつてもう一ぺん向うの谷の白い雪のような花と余念なく月光をあびて立っている母子の熊をちらつと見てそれから音をたてないようにこつそりこつそり戻りはじめた。風があつ

ちへ行くな行くなと思ひながらそろそろと小十郎は後退りした。くろもじの木の匂が月のあかりといっしょにすうつとさした。

ところがこの豪儀な小十郎がまちへ熊の皮と胆を売りに行くときのみじめさといつたら全く気の毒だった。

町の中ほどに大きな荒物屋があつて笹だの砂糖だの砥石だの金天狗やカメレオン印の煙草だのそれから硝子の蠅とりまでならべていたのだ。小十郎が山のように毛皮をしよつてそののしきいを一足またぐと店では又来たかというようにうすわらっているのだった。

店の次の間に大きな唐金の火鉢を出して主人がどっかり座っていた。

「旦那さん、先ころはどうもありがとうございます」

あの山では主のような小十郎は毛皮の荷物を横におろして町ねいに敷板に手をついて言うのだった。

「はあ、どうも、今日は何のご用です」

「熊の皮また少し持つて来たます」

「熊の皮か。この前のもまだあのまましまつてあるし今日あまんついています」

「旦那さん、そう言わないでどうか買って呉くんなさい。安くてもいいです」

「なんぼ安くても要らないです」主人は落ち着きはらってきせるをたんたんとてのひらへたたくのだ、あの豪気な山の中の主の小十郎はこう言われるたびにもうまるで心配そうに顔をしかめた。何せ小十郎のここでは山には粟くがあつたしうしろのまるで少しの畑からは稗ひえがとれるのではあつたが米などは少しもできず味噌みそもなかつたから九十になるとしよりと子供ばかりの七人家内にもつて行く米はごくわずかずつでも要つたのだ。

里の方のものなら麻もつくつたけれども、小十郎のここではわずか藤ふじつるで編む入れ物の外に布にするようなものはなんにも出来なかつたのだ。小十郎はしばらくたつてからまるでしわがれたような声で言つたもんだ。

「旦那さん、お願ひします。どうが何ほでもいいはんて買って呉くない」小十郎はそう言いながら改めておじぎさえしたもんだ。

主人はだまつてしばらくくけむりを吐いてから顔の少しでにかにか笑うのをそつとかくし
て言つたもんだ。

「いいです。置いてお出れ。じゃ、平助、小十郎さんさ二円あげろじゃ」

店の平助が大きな銀貨を四枚小十郎の前へ座つて出した。小十郎はそれを押しただく

ようにしてにかにかしながら受け取った。それから主人はこんどはだんだん機嫌がよくなる。

「じゃ、おきの、小十郎さんさ一杯あげろ」

小十郎はこのころはもううれしくてわくわくしている。主人はゆっくりいろいろ談す。

小十郎はかしこまって山のもようや何か申しあげている。間もなく台所の方からお膳できたと知らせる。小十郎は半分辞退するけれども結局台所のとこへ引っぱられてつてまた町寧な挨拶をしている。

間もなく塩引の鮭の刺身やいかの切り込みなどと酒が一本黒い小さな膳にのつて来る。

小十郎はちやんとかしこまってそこへ腰掛けていかの切り込みを手の甲にのせてべろりとなめたりうやうやしく黄いろな酒を小さな猪口ちよこについだりしている。いくら物価の安いときだつて熊の毛皮二枚で二円はあんまり安いと誰たれでも思う。実に安いしあんまり安いことは小十郎でも知っている。けれどもどうして小十郎はそんな町の荒物屋なんかへでなしにほかの人へどしどし売れないか。それはなぜか大ていの人にはわからない。けれども日本では狐きつねけんというものもあつて狐は猟師に負け猟師は旦那に負けるときまっている。ここでは熊は小十郎にやられ小十郎が旦那にやられる。旦那は町のみんなの中なかにいるからな

かなか熊に食われない。けれどもこんないやなずるいやつらは世界がだんだん進歩するとひとりで消えてなくなっていく。僕はしばらくの間でもあんな立派な小十郎が二度とつらも見たくないようないやなやつにうまくやられることを書いたのが実にしやくにさわつてたまらない。

こんなふうだったから小十郎は熊どもは殺してはいても決してそれを憎んではいなかったのだ。ところがある年の夏こんなようなおかしなことが起つたのだ。

小十郎が谷をばちやばちや渉わたつて一つの岩にのぼつたらいきなりすぐ前の木に大きな熊が猫ねこのようにせなかを円くしてよじ登っているのを見た。小十郎はすぐ鉄砲をつきつけた。犬はもう大悦およろこびで木の下に行つて木のまわりを烈はげしく馳はせめぐつた。

すると樹の上の熊はしばらくの間おりて小十郎に飛びかかろうかそのまま射うたれてやろうか思案しているらしかったがいきなり両手を樹からはなしてどたりと落ちて来たのだ。

小十郎は油断なく銃を構えて打つばかりにして近寄つて行つたら熊は両手をあげて叫んだ。

「おまえは何がほしくておれを殺すんだ」

「ああ、おれはお前の毛皮と、胆きものほかにはなんにもいらぬ。それも町へ持つて行つて

ひどく高く売れるというのではないしほんとうに気の毒だけれどもやっぱり仕方ない。けれどもお前に今ごろそんなことを言われるともうおれなどは何か栗かしだのみでも食っていてそれで死ぬならおれも死んでもいいような気がするよ」

「もう二年ばかり待つてくれ、おれも死ぬのはもうかまわないようなもんだけれども少し残した仕事もあるしただ二年だけ待つてくれ。二年目にはおれもおまえの家の前でちゃんと死んでいてやるから。毛皮も胃袋もやつてしまうから」

小十郎は変な気がしてじつと考えて立ってしまいました。熊はそのひまに足うらを全体地面につけてごくゆつくりと歩き出した。小十郎はやっぱりぼんやり立っていた。熊はもう小十郎がいきなりうしろから鉄砲を射ったり決してしないことがよくわかってるといふうでうしろも見ないでゆつくりゆつくり歩いて行った。そしてその広い赤黒いせなかの木の間から落ちた日光にちらつと光ったとき小十郎は、う、うとせつなそうになつて谷をわたつて帰りはじめた。それからちようど二年目だったがある朝小十郎があんまり風が烈しくて木もかきねも倒れたらうと思つて外へ出たらひのきのかきねはいつものようにかわりなくその下のところに始終見たことのある赤黒いものが横になっていたのです。ちようど二年目だしあの熊がやつて来るかと少し心配するようになつていたときでしたから

小十郎はどきつとしてしまいました。そばに寄って見ましたらちゃんどあのこの前の熊が口からいっぱいに血を吐いて倒れていた。小十郎は思わず拝むようにした。

一月のある日のことだった。小十郎は朝うちを出るときいまままで言ったことのないことを言った。

「婆さま、おれも年老ったでばな、今朝まず生れで始めて水へ入るの嫌やんな気するじや」

すると縁側の日なたで糸を紡いでいた九十になる小十郎の母はその見えないような眼をあげてちよつと小十郎を見て何か笑うか泣くかするような顔つきをした。小十郎はわらじを結えてうんとこさと立ちあがって出かけた。子供らはかわるがわるうまやの前から顔を出して「爺さん、早くお出でや」と言つて笑った。小十郎はまっ青なつるつるした空を見あげてそれから孫たちの方を向いて「行つて来るじやい」と言った。

小十郎はまっ白な堅雪の上を白沢の方へのぼつて行った。

犬はもう息をはあはあし赤い舌を出しながら走つてはとまり走つてはとまりして行った。間もなく小十郎の影は丘の向うへ沈んで見えなくなつてしまひ子供らは稗ひえの藁わらでふじつき

をして遊んだ。

小十郎は白沢の岸を溯のぼつて行つた。水はまつ青に淵ふちになつたり硝子板ガラスをしいたように凍つたりつららが何本も何本もじゆずのようになつてかかつたりそして両岸からは赤と黄いろのまゆみの実が花が咲いたようにのぞいたりした。小十郎は自分と犬との影法師がちらちら光り樺かばの幹の影といつしよに雪にかつきり藍あゐいろの影になつてうごくのを見ながら溯つて行つた。

白沢から峯を一つ越えたところに一疋の大きなやつが棲すんでいたのを夏のうちにたずねておいたのだ。

小十郎は谷に入つて来る小さな支流を五つ越えて何べんも何べんも右から左左から右へ水をわたつて溯つて行つた。そこに小さな滝があつた。小十郎はその滝のすぐ下から長根の方へかけてのぼりはじめた。雪はあんまりまばゆくて燃えているくらい。小十郎は眼がすつかり紫の眼鏡めがねをかけたような気がして登つて行つた。犬はやつぱりそんな崖がけでも負けないというようにたびたび滑りそうになりながら雪にかじりついて登つたのだ。やつと崖を登りきつたらそこはまばらに栗の木の生えたごくゆるい斜面の平らで雪はまるで寒水石

という風にギラギラ光っていたしまわりをずうつと高い雪のみねがによきによきつつたっていた。小十郎がその頂上でやすんでいたときだ。いきなり犬が火のついたように咆え出した。小十郎がびっくりしてうしろを見たらあの夏に眼をつけておいた大きな熊が両足で立つてこつちへかかつて来たのだ。

小十郎は落ちついて足をふんばって鉄砲を構えた。熊は棒のような両手をびっこにあげてまっすぐに走って来た。さすがの小十郎もちよつと顔いろを変えた。

ぴしゃというように鉄砲の音が小十郎に聞えた。ところが熊は少しも倒れないで嵐あらしのように黒くゆらいでやって来たようだった。犬がその足もとに噛み付いた。と思うと小十郎はがんと頭が鳴ってまわりがいちめんまつ青になった。それから遠くでこう言うことばを聞いた。

「お小十郎おまえを殺すつもりはなかった」

もうおれは死んだと小十郎は思った。そしてちらちらちらちら青い星のような光がそこらいちめんに見えた。

「これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ」と小十郎は思った。それからあとの小十郎の心持はもう私にはわからない。

とにかくそれから三日目の晩だった。まるで氷の玉のような月がそらにかかっていた。雪は青白く明るく水は燐りんこう光をあげた。すばるや参しんの星が緑や橙だいだいにちらちらして呼吸をするように見えた。

その栗の木と白い雪の峯々にかこまれた山の上の平らに黒い大きなものがたくさん環わになって集って各々黒い影を置き回ファイファイ々教徒の祈るときのようにじっと雪にひれふしたままいつまでもいつまでも動かなかつた。そしてその雪と月のあかりで見るといちばん高いところに小十郎の死骸しかいが半分座つたようになって置かれていた。

思いなしかその死んで凍えてしまった小十郎の顔はまるで生きてるときのように冴さえ冴ざえして何か笑っているようにさえ見えたのだ。ほんとうにそれらの大きな黒いものは参の星が天のまん中に来てももつと西へ傾いてもじつと化石したようにうごかなかつた。

青空文庫情報

底本：「風の又三郎」角川文庫、角川書店

1988（昭和63）年12月10日初版発行

1990（平成2）年10月20日8版発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

なめとこ山の熊

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>